



第 2 号

昭和45年12月1日

編集 学園ニュース編集委員会  
発行 富 山 大 学

## 改革のための参考資料と動向

### I 参考資料

今回、大学設置基準が改正され、昭和46年4月1日から施行されることになった。その改正点の主要なもののうち、直接関係するものは次のとおりである。

#### 1. 一般教育科目の修得必要単位数

これまで、人文科学、社会科学および自然科学の系列ごとに、それぞれ3科目以上、合計9科目以上36単位を修得することが卒業の要件であった。

今回は、人文、社会、自然の3分野にわたり36単位を修得すること、ただし学部、学科等の種類によって教育上必要があるときは、12単位まで外国語科目、基礎教育科目、専門教育科目の単位で代えることができることになった。

この結果、一般教育科目を3分野にわたり（あまり偏ることなくと言われているが）24単位修得し、12単位を外国語、基礎教育、専門教育の科目の単位にふりかえて修得し、計36単位としても、卒業要件をみたしたことになる。

#### 2. 総合科目

1の学問分野に関する授業科目、または特定の主題を教授するため2以上の学問分野の内容を総合した授業科目（いわゆる総合科目）が、一般教育科目に関する授業科目として認められることになった。

#### 3. 実 施

従来の基準でも、改正後の基準の弾力性の範囲内に含まれているため、従来どおりの方法でもさしつかえない。従ってどう改め、どう実施するかは大学側にまかされている。

### II 動 向

#### 富山大学改革準備委員会

ほとんど毎週のように会合がもたれ、真剣な討論が

続けられている。

改革に際し、その実施は当然新年度入学生からということになるので、教養部をどうするかという方向に眼がまず向けられたのも、極めて自然であった。しかし、最初に教養部の改革をし、その後において学部の改革に手をつけるという方法は、大学全体の改革ではなく単なる一部の手直しに過ぎなくなる恐れもある。そこで、大学全体をどう改革するかということの中で教養部をどうするかを問題にするのでなければならない、との反省がなされた。いわばビジョン作りが先行すべきだということである。

ただ、これは実現不能な空論になる危険性もあるので、当面2面作戦をとることにし、一般教育科目の授業を専門移行後の学生を対象にして行なう、いわゆるクサビ型方式、などについての論議がなされた模様である。

#### 教育学部

学部改革のために『学部改革準備調査会』を設けて（1969.10.29発足、委員10名）審議をかさねてきたが、このほどその審議の結果を

- ① 研究体制について
- ② 教育体制について
- ③ 制度・運営について
- ④ 附属学校・教育実習について
- ⑤ 「学生参加」について
- ⑥ 免許法、その他について

の6項目にまとめて学部長まで提出した。

学部教授会はこの趣旨に基き数回にわたり検討した後『学部改革委員会(仮称)』を発足させることを決め、11月18日に18名の委員を選出した。(詳報は次号に予定)

#### 教養部

大学設置基準改正に関し、数次にわたっての教授会や研究会などがもたれ、継続審議中である。

その中での意見を1・2拾うと、次のようなものがあった。

1. 学問がよいよ専門の枠の中に閉じこもる傾向にある現在、一般教育は専門への導入であると同時に総括でなければならない。
2. その意味で一般教育は重視すべきであり、専門移行後の学生、3・4年生あたりを対象としての一

般教育もなされてしかるべきであろう。

3. 授業はこれまでも前記の認識からなされてきたはずだが、改めてこの原点に立ち戻って講義がなされるよう、反省と多くの工夫がなされるべきである。

なお、制度委員会(仮称)を設け、検討を続けることになった。  
(編集委員会)

## 小 石 の 塔

文学部 助教授 山 口 博

賽の河原 賽の河原では、亡者と鬼とが小石の塔の建設をめぐる紛争をするそうだ。それが過去から未来にわたって永劫繰り返されているということは、建設も破壊も容易だからであり、再建が必然だからである。私はこの世が賽の河原でないことを残念に思う。小石の塔を簡単に作ったりこわしたりできるのがうらやましいのである。繰り返し作ることを余儀なくされれば、亡者とても考えるであろう、物理的亡者は力学的に小石の積み方を工夫し、芸術的亡者はデザインに凝る。

この亡者も小石の塔を作るのであるが、一般教養の単位をとったものの、教養に乏しい亡者は、自己の体験が唯一の頼りである。

一般教養の廃止 新しい小石の塔には、一般教養はない。戦前の大学教育を受けた者は視野が狭かったという反省から、一般教養が設けられた。これは驚くべきことである。旧制大学の下には、高等学校というあるいみでは理想的とさえ思われる教養教育機関があった。それにもかかわらず視野の狭い人間が生まれたというのであるから。3年間それのみ専念しても身につかなかったのに、1年半や2年で、旧制高校よりさらに悪条件のもとでどうして教養教育ができよう。

旧制大学が専門家養成であったことの反省は、専門家を養成しないという皮肉な結果をもたらした。2年間の専門教育は基礎知識さえ修得できずに終る。兼好法師の言いくさではないが、一芸に秀でた者は他の分野においても強い理解力を持つ。その理解力は、一芸に打ちこんだことによって養われるのである。一芸にたずさわらぬ意識のない者が、多くの話を聞いても身についた教養になるわけがない。一芸に達する過程において、主体的に摂取したものが、本当の一般教養とな

る。

新しい塔は、1年から専門教育である。履修の過程において必ず専攻以外の専門知識が必要になる。そういう講義でなければならないし、そういう受講態度でなければならない。専攻の専門と有機的に結合された他の専門講義、これが教養講義である。

昭和25年に私が大学に入学した時、学生は1・2年生だけであり、専門の講義は、1・2年を対象に開講された。専門の単位が教養の単位になる制度は、不十分な教養講義を補うに十分だった。私たちの多くは、4年にわたって、教養という名の専門を学んだ。現在私に乏しい教養があるならば、一般教養の教養ではなく、専門講義の教養であると思う。

総合講義 専門を達成するために、他の分野の専門講義を摂取するという事は、一つのテーマの下での総合講義を生む。私はそのような講義を受けたことはないが、したことはある。自己の体験を依り所として塔を作るのであるから、そのことを語らねばならない。

私が経済学部の吉原節夫助教授にお願いして総合講義のまねごとを行なったのは、5・6年前になる。総合テーマは「近代日本における家族制度」。吉原助教授は民法の立場、私は文学の立場の講義からなる。これは近代文学を理解するにあたって、家族制度の専門知識が必要という学問的必然からの計画であって、講義の新しいシステムを開拓しようというのではなかった。私のプランの中には、社会学・倫理学・政治学の立場からの講義もあったのだが、人を得られなかった。

私は単純に、国文専攻の学生に吉原助教授の専門の話聞かせる程度に考えていたのであるが、予測しない方向へ進んだ。吉原ゼミの学生と国文の学生と、更に教養の学生も参加、運営は学生があたり、教官の間

の質疑応答デスクッションも生じた。

ことは簡単のようであるが、実行に際しては多くの反論があった。講義は一人の教官の責任で行なうべきもの、そのような前例がない、関連知識は担当教官が消化して教えるべきもの、他学部の教官の講義なら人事教授会にはからねばならぬ等々。私は正規の講義時間はずし、課外として行なわざるをえなかった。

私は今、1冊の本を眺めている。「東京大学公開講座『家』」という本である。私の考えていたプランが美事に実現している。社会人類学・社会学・倫理学・政治学・国文学・経営学・建築学・都市工学・民法等の立場からの総合講座である。これが行なわれたのは昭和42年だそうである。

テーマは同一であっても東京大学のそれとは比較にならぬ貧しい総合講義であったが、その成果を考えると、それへの執念は捨てきれない。執念にとりつかれ

た亡者は、小石を積みながら、テーマを考える。「貨幣経済と江戸文学」「藤原政権と平安文学」「文学にあらわれた裁判」「漂流と文学」「刺客の哲学」等々。

昭和45年前期の教養部講義「文学」の最終時間に、「東方ルネッサンスと平安文学」と題した話をした。ヨーロッパルネッサンスから始まり、唐宋の社会史・韓愈・柳宗元・杜甫や宋の哲学を説き、平安文学に至る話は、私には重荷であった。他の専門にわたる私の不消化な講義は学生を困惑におとし入れたであろう。それを救う道は総合講義以外にはありえない。

しかし、かつての障害を考え、準備過程のわずらわしさを思うと、小石を積む手にもぶるのである。

賽の河原 亡者の作る小石の塔は実りのないものである。無駄な努力である。対策本部の制度委員として、前にも小石の塔を設計したような気がする。この世に地藏菩薩はいないものだろうか。

## 大 学 雑 感

教養部 助教授 藤 井 昭 二

今年、静岡、新潟、札幌、京都などで年会や研究会などがあり、それぞれの大学をよく見せてもらった。新潟大学では五十嵐浜の新校舎を見せて貰った。今まで北大や名大に行くごとにその広さが羨ましかったが、静岡や新潟大学の新校舎は、前者に劣らない広さを有している。富山大学の場合どうであろう。五福の敷地はご存じの通り、各学部が集中して数年しかへてないのに、現在の敷地に工学部はくることができず、また食堂や総合図書館も建てられない状態である。

ヨーロッパの古い町にある大学、パリ大学のことを新田先生が本紙の創刊号に書かれていたが、世界一古いといわれるイタリアのポロニア大学も、古い多くの大学と同じく、繁華街の真中にあり、運動場などないようであった。

しかし、フランスの新しいカーンやグルノーブルや、他のいくつかの大学はよく手入されて公園の様な広大な敷地に、教室や寮や研究所が点在しており、敷地の中にバスの停留所が数カ所あり、一番近い食堂に行くのにも十分以上かかった。富山大学のように主道路で学生が拡声器の音をあげて演説をするとどの建物にも聞こえるような便利さはない。

ソ連の大学といっても、ハバロフスクとイルクーツ

ク大学のごく一部しか知らないが、それらはヨーロッパと同じく町のど真中、レーニン広場やマルクス通りの近くにあつて動きがとれないようになっていたが、イルクーツでは郊外に大学都市を建築中で広大な土地に点々と建物ができていた。

フランスで会議および巡検中4つの大学の学生寮に泊ったが、パリ大学をのぞいて、学生寮はすべて敷地内にあり、6畳~8畳位の個室で、洗面所、机、本棚、ベット、タンスつきで快適にできており、街のちょっとしたホテルより静かで設備がよい。学生食堂は外観も中味も立派で、街で食べると10フランは充分にする食事を学生には2フランで食べさせており、そのため食券売り場での学生証の提示も厳重で、食堂の入口は、パリの地下鉄と同じく一方通行の1人用の回転ドアになっており、体格のよい切符きりが立っていた。

ソ連では数年前でも殆どの学生が30ルーブルの返却しなくてよい奨学金を貰っており、生活の心配なく勉強しているようであった。それぞれの国の学生への手厚い保護が見られる。またどこに行っても、白人、黒人、有色人がきわめて自然に一つになっておしゃべりをしているのが印象に残った。

富山大学ができて20年すぎた。富山大学は富山にあ

ることに大きな一つの意義があるはずだが、今後の20年でどうなっているであろう。もし学部制が維持されていたら、薬、工、教育、教養、理、法文経、医、農の8学部位をもつ大学になり、研究所も和漢薬研究所、生涯教育研究所、環境保全研究所、極東研究所などできて、1年次の学生数も現在の1,000人から1,500人になり教職員も倍の1,500人位になっているであろう。その時富山大学はどこにあったら一番よいだろうか、しかし敷地がないため現在のままであるか。鬼に笑われても50年か100年の見通しをたててみては。

この数年一般教育を担当し大学について私なりに考えた。お役にたつかどうかかわからないが何か参考にもなれば幸いと思い幾つかのことを次に書いてみる。

### 1. 助言教官制度の拡大

現在教養部の教官は1・3期に1人当たり60人2期に30人平均の学生を助言のため割当てられ、助言教官は自分の受持学生の名前も顔も知らないことの多いのが実情である。現在のような多人数であればそれもしかたなかろう。しかしこれを全学の教官に割りふれば教官当り3人～6人となり、これに必修の1単位のゼミでも行なえば、英国のテューター制度にも近くなり、人間的、学問的接触も多く著しい教育効果があがるのでなかろうか。

### 2. 共通単位制度

最も望ましいあり方はコレッジ・ド・フランスのように勉強したいものだけが集まり、講義をきき、それについての試験もなくまた何の資格もなしという形式であろう。しかし単位制度が続くなら、望ましいのは欧米でみられるようにA大学の単位がB大学でも認められることであるが、このことは学内だけで解決できない問題である。

富山大学はすくなくも総合大学の建前をとっているのであるから、各学部の単位を共通にしたらどんなものであろうか。たとえば経済の講義であるが、教養で行なわれている講義がもちろん一般教育の単位にもなるが、学生の希望があれば、経済学部にある専門の講義の単位にもなり、教育学部社会系の経済の単位にもなりうるということである。これはすべての学科、実験についても同じく適用され、たとえば理学科で行なっている、ある化学の講義は、薬学でも工学でも教育でも教養でも夫々のある単位になりうるというものである。また卒論を書こうとする学生であれば、学部にとらわれないで、どこの学部にでも専門の先生の所で

卒論の指導がうけられる形にも通じるものである。これは結局、教養部、各学部を解体し、学部よりも学問そのものの専門系列に重点をおく編成に組み替えることにつらなるが。

### 3. 職人と芸術家

私は、大学は研究と創造的人間を養う所だと考えている。単なる技術者をつくるためであったら専門学校でよい。ヨーロッパでは今でも工学系統はホーホシューレといっている所が多い。多くの民芸品に残ってる職人の芸の美しさを私達は知っている。一つのことに習熟した、むだのない美しさ。職人というのは確かに一つの物をつくることについては専門家である。しかし時代が変わって、“一つの物”が不要になった時、新しい物をつくれないでは時代に取りのこされていく。この新しい物を創りだしていくのが芸術家でなかろうか。

この型式変換の多い現在で、一つ一つの型の習熟についてはその職人にまかしておけばよい。新しいモデルがなぜつくらねばならないか、それがどんなものであるかを研究するのが大学を出た人のする仕事でなかろうか。

新制大学の理念が単なる専門家を作るのではないということで、一般教育が大きな重みをもった。今までどんな学説があって、それがなぜ新しい学説に変わり、変わらなければならなかったか、その必然性の追求から、次にはどのようになっていくであろうという考え方。私は自分の担当の授業を通じて、そのような考え方が養われ、地学と関連のない分野に進む大方の学生が、考え方を通じて自分の専門や人生を見てくれたらと念じているのであるが、現実には程遠いことがくやまれる。

### 4. 無用の用

新制大学の理念である一般教育が、現状でよいとは思わない。期間にしても、1年がよいのか4年かかってやるのがよいのか、その中間がよいのか十分に議論の余地があろう。議論の余地があり、一方専門の学問の量が増大しているからといっても、一つでも二つでも多く専門の授業を三期に増していこうとする考えには賛成できない。今から5千年、1万年たったとしよう(20年、30年でもよいのだが)。その時の情報の量は現在の何万倍になっているだろう。といって、その時代の教科書は現在の百倍も千倍も厚いだろうか。教えることが沢山あるからといって、人生60年のうち、現在の2倍も3倍もいわゆる学生生活が続くであろうか。もしそうであったら学生で一生終って何の仕事もしな

いで死んでしまうことになる。このモデルチェンジの多い世の中で一つ一つ細かいことを教えていたら幾ら時間があっても足りなからう。

もう一度、大学教育で何が大切か、一般教育、専門教育を通じて考えてみる必要がなからうか。青春に余暇をもち、自我・友・人生・国・世界を自分なりに考えることは、きびしい訓練とともに一見無用に見えて非常に大切なことではなからうか。

### 5. 論文集め

大学が研究機関の一面をもっているからには、その業績を一つ残らず集めて永久に保存公開することは、研究機関の一つの義務で、その大学がどの位学界に貢献しているかを判断する資料の一つは、この義務をどれだけはたしているかではなからうか。

論文が人の価値をきめるすべてと考える人はいないであろう。しかし研究者にとって全精力を注いだ一部であることを否定することはできない。

業績が一覧されていたら、大学の人事がいかにか民主的に公平に行なわれているか、誰もがなっとくできよう。

また学生が専攻をきめ、どの先生について勉強すればよいか、口づてでなく、自分でなっとくして専攻をきめれるのではなからうか。

大学の教官は研究者と教育者の二面をもっている。

役職が多くて論文のにくい先生には皆が代って、その先生が仕事のしやすい環境にしてあげることでもできるのでなからうか。

### 6. 一期校と二期校

最近、いろんなことに受益者負担がいられている。受益者負担の原則を極端に言えば各大学・各学部・各学科によって授業料が異なっていてよいことになる。300億と10億の年間予算の大学では、前者の学生は後者の30倍の授業料をはらうことになる。

講座制・学科目制・課程制による校費の不平等をなくしていったら、もっと人事の交流も滑らかに行なわれ、学生の大都会集中もなくなるのではなからうか。校費の差別が廃止され平等にして、各県一つの総合大学の一期校と、単科大学の二期校をつくれば入試の問題もいくらか解決するのではなからうか。

現在国立大学にはいる人間は好むと好まざるにかかわらず、同世代の20人に1人の次代をになう人である。憲法にいう教育の機会均等が金力でなく能力によるのなら、勉強をしたい人で、ある能力以上をもっていたら、授業料をただにし、生活費を見てもよいのではなからうか。その時は特に防衛費を考えなくても、彼らは彼らなりの日本を築いてくれよう。

## 昭和46年度富山大学経済学専攻科

### 経理経営専攻学生募集について

#### 1. 募集人員

経理経営専攻 10名

#### 2. 出願資格

1. 大学を卒業した者または昭和46年3月卒業見込みの者
2. 文部大臣の指定した者（昭和28年文部省告示第5号）
3. 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者
4. 本学専攻科において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者

#### 3. 出願期間

昭和46年1月6日(水)から昭和46年1月12日(火)まで

#### 4. 選抜方法

入学者の選抜は、学力検査、調査書、健康診断お

よび面接の結果を総合して行なう。

#### 試験期日および科目

期 日	時 間	検 査 科 目
昭和46年 1月22日(金)	9.00～12.00	経営・商学・経済
	13.00～14.30	英 語
	15.00～	面 接 健 康 診 断 (再診を必要とするもののみ)

※なお、出願手続など詳細は、経済学部学務係に照会されたい。

## 《工学部から》

# 橋本宇一博士特別講演会の報告

さきに学園ニュース創刊号でご案内申しあげた、科学技術庁金属材料技術研究所 客員・前所長 橋本宇一先生の講演会は、雨もよりの11月7日、工学部講義棟会議室いっぱいの教職員、学生および外部からの参会者を集め、3時間無休という終止熱心な先生のご講演に聴講者一同魅了されつつ、滞りなく行なわれた。

ここ数年間にわたって、全世界で行なわれている金属材料関係の研究の実態と状況は、あたかも目前に見るがごとく展開され、

1. ウラン原子の電子顕微鏡写真の撮影に関連して、電子顕微鏡の加速電圧限界の問題
2. ソ連キエフのパトン電気溶接研究所の状況と、宇宙溶接技術に関する課題
3. 低圧プラズマ溶接、溶極式アーク溶接、電子衝撃溶接など、最近の溶接技術研究の状況
4. フィリップス社におけるサイクロトロン利用による化学分析(放射化)の実情、異方性マグネット材料に関する研究と製造、微小直径シース管封入熱伝対の開発
5. イギリス、フランスおよびアメリカにおける材料のフラクチャー・タフネス研究の状況と、各国

における研究精神と態度の問題

6. ホイスカー、メタリック・ファイバーの生産技術に関する研究
7. 超電導合金の研究、金属への微量元素の各種影響の問題とその工業的応用
8. 連続製鋼法における開発課題
9. プラスチック被覆材料に対する無損傷レストアード・エレクトリック・インダクション・ヒーテッド・ウェルディングの実例
10. 原子力製鉄と関連しての、エネルギー需給の問題点とその対策

などを中心テーマに講演せられた。

前夜来高され、講演会の終了とともに工学部内を視察された先生は、73才とはとても思われないお元気さで、当日夕刻帰京の途につかれたが、先生のご盛んな学問的情熱のほとばしりは、ご講演の内容とともに参会者に大きな影響を与えたものと考えられる。

なお、本講演会は富山大学工学部と北信越工業教育協会富山県支部の共催のもと、軽金属学会北陸支部および日本鋳物協会北陸支部のご後援をえて行なわれたことをご報告申しあげる。(沢島記)

## スキー講習会実施計画

1. 期間 昭和46年1月7日(木)～13日(水)  
6泊7日間
2. 場所 志賀高原ブナ平スキー場  
(長野県下高井郡山の内町)
3. 宿泊所 同上清広荘(清広食堂)
4. 対象 本学学生全般 100名
5. 申し込み 11月24日(火)～12月12日(土)
6. 申し込み場所 体育会事務局および工学部学務係
7. 健康診断 12月16日(水)午後1時半から3時まで
8. オリエンテーション 12月12日(土)(体育会総会終了後)
9. 指導教官 体育教官ほか

## 教養部から専門課程

### への移行状況

44年度入学生		文	理	教	経	薬	工	計
		在籍	59	124	158	155	98	294
43年度入学生以前	移行許可	46	102	143	144	85	284	804
	不可	13	22	15	11	13	10	84
	不可者中、休学あるいは長欠のもの	7	5	2	2	2	7	25
43年度入学生以前	在籍	4	15	4	1	3	24	51
	移行許可	0	7	2	0	2	16	27
	不可	4	8	2	1	1	8	24

理学科に仮移行1名、追試の結果により正式に決定

(教養部調)

# 富山大学学生健康保険組合実態

(学生部調)

## 1. 加入者調

(昭和45年5月1日現在)

	在学者	加入を必要としない者の数	加入を必要とする者の数	加入者	未加入者	加入率
昭和39年度	2,667名	101名	2,566名	2,470名	96名	96.26%
昭和40年度	2,851	93	2,758	2,561	197	92.85
昭和41年度	2,967	99	2,868	2,704	164	94.28
昭和42年度	3,161	88	3,073	2,828	245	92.02
昭和43年度	3,428	84	3,344	3,074	270	91.92
昭和44年度	3,657	84	3,573	3,177	396	88.91
昭和45年度	3,806	86	3,720	3,300	420	88.70

加入を必要としない者の数とは、社会保険等において厚い給付を受けることのできる者

## 2. 利用者調

年度別	組合員数	利用者数	利用率
34	561名	207名	36.9%
35	1,091	308	28.2
36	1,675	406	24.2
37	2,245	577	25.7
38	2,358	564	24.0
39	2,470	598	24.2
40	2,571	541	21.0
41	2,704	524	19.4
42	2,828	532	18.8
43	3,074	593	16.0
44	3,177	467	14.7
計	24,754	5,317	21.5

## 3. 男女別・病類別罹患状況

(昭和44年度)

病 類 名	男	女	計
肺 結 核	4件	0件	4件
脚 気	1	0	1
その他内分泌系及び物質代謝反応	1	8	9
貧 血	8	7	15
淋 巴 腺 炎	6	7	13
神 経 痛 及 び 麻 痺	42	19	61
精 神 神 経 症	1	3	4
聴 器 の 疾 患	15	13	28
視 器 の 疾 患	79	35	114
心 臓 の 疾 患	1	1	2
高 血 圧 症	6	2	8
その他循環器の疾患	7	7	14
急性鼻咽頭炎(感冒)	55	37	92
鼻及び副鼻腔の疾患	34	14	48
咽頭及び扁桃の疾患	23	8	31
肺炎その他肺の疾患	8	3	11
気管支炎及び気管支喘息	53	37	90
胃及び十二指腸の疾患	50	15	65
虫 垂 炎	9	5	14
下 痢 及 び 腸 炎	15	3	18
その他消化器系疾患	2	1	3
腎炎及びネフローゼ	12	3	15
その他泌尿器系疾患	16	14	30
性 器 の 疾 患	2	1	3
皮 膚 炎	29	3	32
湿 疹	30	14	44
癬 瘡	1	3	4
その他皮膚炎及び皮下組織疾患	36	31	67
関節炎及びリュウマチ	15	16	31
捻 挫 打 撲	43	12	55
脱臼	4	0	4
骨 折	16	6	22
創 傷	30	15	45
火 傷	0	4	4
そ の 他	33	6	39
計	687	353	1,040
組 合 員 数	2,399	778	3,177
組合員に対する利用件数率	28.63%	45.37%	32.73%

# 昭和45年度卒業見込者の就職内定者数

(昭和45年10月15日現在一学生部調)

学 部	学 科	(a)卒業(見込)者数			(b)aのうち就職希望者数			(c)bのうち就職決定(又は内定)者数			(d)就職率( $\frac{c}{b} \times 100$ )		
		計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
文理学部	文 学 科	60	30	30	47	18	29	14	6	8	29.8	33.3	27.6
"	理 学 科	90	73	17	62	48	14	30	25	5	48.4	52.1	35.7
	計	150	103	47	109	66	43	44	31	13	40.4	47.0	30.2
教育学部	小学校教員養成課程	89	24	65	88	23	65	51	8	43	58.0	34.8	66.2
"	中学校教員養成課程	52	27	25	51	26	25	12	3	9	23.5	11.5	36.0
"	養護学校教員養成課程	17	4	13	17	4	13	10	2	8	58.8	50.0	61.5
	計	158	55	103	156	53	103	73	13	60	46.8	24.5	58.3
経済学部	経 済 学 科	164	161	3	159	156	3	140	139	1	88.1	89.1	33.3
	計	164	161	3	159	156	3	140	139	1	88.1	89.1	33.3
薬学部	薬 学 科	52	15	37	36	6	30	23	4	19	63.9	66.7	63.3
"	製 薬 化 学 科	50	46	4	24	20	4	21	19	2	87.5	95.0	50.0
	計	102	61	41	60	26	34	44	23	21	73.3	88.5	61.8
工学部	電 気 工 学 科	46	46	0	41	41	0	41	41	0	100	100	0
"	工 業 化 学 科	38	38	0	33	33	0	30	30	0	90.9	90.9	0
"	金 属 工 学 科	36	36	0	29	29	0	28	28	0	96.6	96.6	0
"	機 械 工 学 科	48	48	0	34	34	0	31	31	0	91.2	91.2	0
"	生 産 機 械 工 学 科	39	39	0	38	38	0	38	38	0	100	100	0
"	化 学 工 学 科	31	31	0	26	26	0	26	26	0	100	100	0
	計	238	238	0	201	201	0	194	194	0	96.5	96.5	0
	合 計	812	618	194	685	502	183	495	400	95	72.3	79.7	51.9

## ●創刊号の訂正

(頁)	(欄)	(行)	(誤)	(正)
2	右	12	1人	1人
"	"	最終行	奥貫 晴弘	助教授 奥貫 晴弘
3	"	"	挙指	挙措
4	左	2	桁外れた図書館	桁外れに完備した図書館

## <あとがき>

創刊号で、次号からは楽しく明るいものにしたいな  
どと書いたが、どうもその表現が悪かったと反省して  
いる。大学改革の努力は続けられているが、まだ暗中  
摸索的なところが多分あって、十分明るい光はさし  
ていないみたいである。

楽しく明るいというのは、親しみの持てるという意  
向からであったのだが、今回、学内中堅の先生方に書

いて頂いたのは、そこに述べられているような意見も  
あることを、改革準備委員会においても参考にして貰  
えはしまいか、同時にそこに明るい未来を望み見る楽  
しみが得られるであろう、という期待からである。そ  
して、結果は親しみのもてる方向へと一步踏みだして  
いると思うのだが。